

退官に寄せて

井上先生の思い出 —介護における家政学の意義—

石田 一紀

井上先生から、数多くのことを教わった。不肖未熟の身だが、お会いして良かったといえることがたくさんある。とりわけ、教育とはどうあるべきか、介護福祉教育とはいかにあるべきか、これを強く学んだ。そして、もうひとつ、介護における家政学の意義である。介護の本質とは何かを考え続けてきたが、井上先生と会うことなくして、今日の見解は成り立たなかつただろう。

介護の本質を、家政学の視点から体系化していく重要性を、一貫して述べてこられたのが井上千津子先生である。

先生は、介護を「生活行為を成立させる援助を通して、命を護り、生きる意欲を引き出し、生活を維持する」と定義された。その上で、「介護における家事機能の意義」として、次の8点を指摘されている。

①生活手段の整備は、命を護り、生きる意欲を引き出すうえで、基本的条件である。

②家事援助をどのように行ったかというプロセスのなかで、高齢者自身の生き方の承認や自分らしさの表現が保障される。

③生活基盤の整備は、介護予防に結びつく。

④家事機能の回復により、より主体的な生活行動を拡大していく。

⑤家事機能の遂行による他者の評価は、生きる意欲を引き出していく。

⑥家事援助によって社会との交流性を高める。

⑦家事援助を通して、家族の発達を援助する。

⑧家事援助を通じた生活文化の伝承。

井上先生を除けば、全体として、これまでの介護理論においては看護研究の応用が中心であった。今もって、家政学研究は介護教育においては補助的な立場におかれているのが現状である。

介護において家政学がいかに意義をもっているかを、絶え間なく教育されてきた井上先生にとって、介護福祉教育における生活援助の後退は耐え難いものがあったと思われる。「家政概論」をはじめとして家政学と関連する教育科目が介護福祉教育から姿を消す。かわりに「喀痰吸引」をはじめとした医行為の一部が介護業務に位置

づけられ、同時に介護福祉士養成カリキュラムにおいて必修科目となる。

これらの政策動向は井上先生の思想とは相容れないものであろう。

井上先生がいつも学生に伝授されていたことがある。

すなわち、「生活」とは「生命の活性化」である。「生活」を支える介護職にとって「合理的」で「科学的」な家事技術を学ぶことは「生活」の本質を理解することである。単に生活行為を介助するのではない。その人の生きてきた時代を、生活文化を理解し、生活技能を学ぶことによって、高齢者自身の生き方、その人らしい生き方の支援へと接近しようという内容である。

そして、生活基盤の整備があって介護予防に結びつくということ、家事機能の回復があって、より主体的な生活行動が拡大していくということ、同時に高齢者の関心を社会的に広げるといふ、いわば家事機能の意義を介護の本質に照らして述べておられた。

また、先生のホームヘルパー時代の経験談は、多くの学生の心を沸かせていった。入学までもない学生の多くは衣食住の三大介助が介護だと思こんでいる。その学生たちに、生涯、その人らしく生きていくためのノーマライゼーションのあり方を、生きた言葉で教授されていたのが井上先生である。学生だけではない。先生の主体的力量ゆえに切り開くことのできた介護の夜明け談話は、聴く者に絶えず介護とは何かを思い起こさせ、原点に立ち戻らせていった。

いま、多くの介護労働者の仲間が働きがいを見失い、ともすれば時代に流されようとしている。そうした時だからこそ、先生には全国を巡回して、多くの仲間働く意欲を沸きあがらせて頂きたいと思っている。そして、これからも、一人でも多くの学生に‘学生があこがれる素敵女性’として、いつもでも教壇に立っていただきたいと願っている。

最後に、私事だが先生の漬け物が味わえなくなるのが残念である。そして、落語を語る機会が減ることが残念である。しかし、先生の後を追うことはできない。